ふるさと歳時記

◆緒方洪庵と高橋玄策

晞干区　野々下晃

十月上旬横浜から小堀桂一郎著「靖国神社と日本人」、高瀬広居著「天皇家の歴史」と共に緒方富雄（洪庵の末裔）編著の「緒方洪庵姓名録解読編」の抜粋十枚が送ってきた。

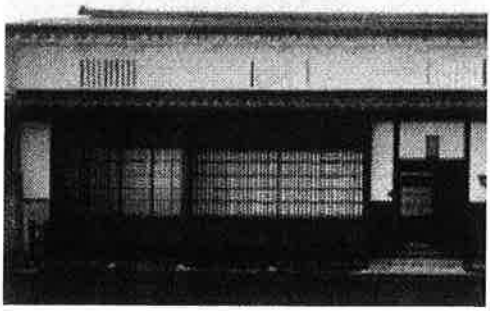
その記述によると、洪庵は天保九年（一八二九）大坂の瓦町に蘭学塾を開いた。その時洪庵は二九歳であった。洪庵は蘭学を修めた医学者であったから、その塾に入門する者は蘭学を学びたい者とそれを通して医学を修めたい者とがあって、その数は六百二十七名に達したという。その中の現大分県域からの入門者は左の通りであった。

日出　小川文之助　田川常蔵
中津　前野良伯　福沢諭吉
佐伯　高橋玄策　小浦　脇谷完吾

緒方洪庵肖像

この中の福沢諭吉や前野良伯は周知の人物であるが、その他については多くを知らぬ。

天保九年は今を去る約一七六年前で幕末であるが、この時代の交通事情等より推測して日田に遊学した中島子玉の胆力に敬服していたが大坂と日田では比較にならぬ。惜しいことに佐伯出身の高橋玄策は洪庵方に入門後客死している。佐伯は子玉や明石大助に劣らぬ秀才を失っている。この人物について詳しく調べたいと思っている。



大阪中之島にある適塾

◆緒方洪庵は佐伯姓

昨年、大阪在住の会員緒方惟幸氏から、近くにある適塾資料館の緒方洪庵は佐伯姓だと言うがその出自が判らな

いか、と問い合わせがあった。緒方富雄（東京帝大助教授・医学博士）著「緒方洪庵傳」には次のように記してある。

洪庵の家は代々佐伯を名乗ってきた。ところが洪庵は生まれた時「田上」を名乗り後に「緒方」と申すようになった。（中略）

『この惟栄の数代後の惟康は、当時豊後の大友氏に仕えて佐伯荘に住み、土地の名をとって「佐伯」と称した。これが洪庵が生まれた「佐伯」の家の祖先である。後大友氏の没落（文禄二年）と共に佐伯氏は佐伯の地を去り、一家はなればなれになった。その時の当主惟定の一番末の弟惟寛はまだ幼かったので、母と共に安芸にまいり毛利輝元をたよった。

この惟寛は後に備中の国足守に住むことになり、ここで足守の佐伯氏の祖となった。惟寛は寛永二年（一六二五）になくなったという記録がある。』

しかし、惟定の弟に惟寛という弟がいたかどうか、佐伯氏系図には記載がない。また毛利輝元を頼るつてがあったとも思われない。

これまでの情報収集で中国地方の佐伯氏は四国から渡った可能性が強い。秀吉の四国征伐で伊予の河野・黒川・大野の諸将は小早川氏の軍門に下り、安芸竹原に幽閉された。河野氏の足軽大将佐伯河内守惟重、黒川氏の旗下佐伯伊賀守惟之、大野氏の旗下佐伯重兵衛惟喜ら主君を失った四国勢は小早川氏に従軍し九州征伐に動員された。

彼らの子孫は毛利・吉川・小早川氏等に仕え中国地方に定住した者が多いようである。したがって洪庵の先祖惟寛も、あるいはそのルートではないかと思われるが、その源流はいずれも豊後佐伯氏である。（佐藤巧説）

◆麻生英臣氏の寄贈図書

東京都世田谷区に在住する麻生氏は古くからの会員で、国内外を巡りその都度ご当地のパンフレットや資料を送っていただいている。特に史跡を活かした観光浮揚策など参考にすべき助言も多い。今回は三冊の本を佐伯史談会に寄贈された。

「学び・調べ・考えよう（フィールドワーク）日吉・帝国海軍大地下壕」

日吉台地下壕保存の会編

横浜の慶應義塾日吉キャンパスの地下に築かれた連合艦隊司令部跡等を紹介しながら太平洋戦争の歴史をわかりやすく解説している。

「戦争のかたち」下道基行著

行って、見て、さわれる戦争

戦争遺跡を求めてバイクに乗って旅立った。海岸へ、山奥へ、住宅地へ……。かって、そこに「戦争」があ

ったのだ。日本全国73カ所、ガイド付き。※佐伯の掩体壕と丹賀砲台もカラー写真で紹介されている。

「戦争のかたち」丹賀砲台

「日吉帝国海軍大地下壕」

「埼玉の文学」さいたま文学館

第一章●『田舎教師』の世界

第二章●埼玉ゆかりの文学者たち

第三章●永井荷風コレクション

第四章●埼玉の豊かな文学風土

この冊子は平成九年さいたま文学館の開館記念誌として刊行された。多くの文学者と作品がグラビア判で掲載され「武蔵野」の国木田独歩も紹介されている。

麻生氏は一月二〇日帰郷の際、国立公文所館発行の「正保城絵図（頒布品一枚一〇〇〇円）」の内、豊後岡城・臼杵城・日出城、伊予大洲城・信州高遠城の五枚を史談会に託された。残念ながら佐伯城絵図は公文書館に所蔵されてないという。

「叙情詩」の仲間たち
前列右端　国北独歩

国木田独歩

◆龍護寺佐伯氏例祭

昭和四十五年十一月二十五日、佐伯史談会によって龍護寺に大神姓佐伯氏歴代の位牌が納められ、当日は日向北川村瀬口の老人クラブの代表を招いて第一回の位牌祭が開かれた。

当時副会長の羽柴弘氏は『佐伯氏四百年の歴史』と題して論説を書いている。江戸時代の資料は多いが「これ以前の中世佐伯氏に係る部分は皆無に近く、杳として拠る所がない。……これを私共は中世における佐伯氏四百年の歴史を追究するポイントとしたい。」

以来、佐伯氏同族会も発足して各地から例祭に訪れ佐伯氏研究も飛躍的に進んだ。しかし同族会の方々も多く故人となり、中世研究会が肩代わりして現在に至っている。

昨年は土佐の細木さん一行と延岡市北浦町の児島栄氏が来訪された。今年は惟治没後四八〇年の節目に当たり今後の例祭のあり方、中世研究のあり方を再検討するべきであろう。

「豊後佐伯一族」中世研究会発行

一～五号　各流佐伯氏と家臣団他
六号　祖母嶽大明神縁起
七号　伊予国浮穴郡久万山の佐伯氏
八号　土佐の細木氏
九号　土佐の佐伯・堅田氏

羽明山龍護寺

◆西予市野村町の乙亥大相撲

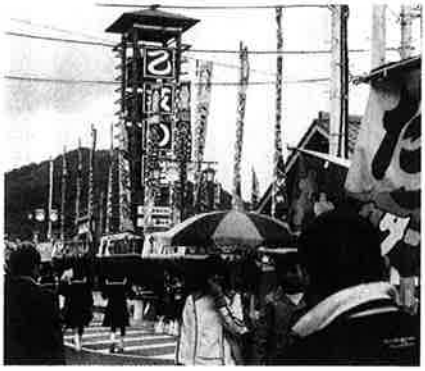
昨年十一月二十六日、大阪の会員緒方惟幸氏の招待で八幡浜から四十分山間部へ、十三年ぶりに野村町を訪れた。

野村町の緒方家は十三代佐伯惟真の子で惟定の兄惟照に始まる名家である。嘉永五年に大火があり時の大庄屋緒方惟貞は愛宕神社に願相撲を奉納した。これが乙亥相撲の始まりという。

愛宕神社から乙亥会館

以前は緒方家の田圃で相撲大会を催していたが、今は立派な乙亥会館が出来、全国でも珍しいプロとアマが激突する相撲大会が二日間、催される。

今大会では地元出身力士玉春日と大関栃東を間近に見ることができた。また招待選手として参加されていた豊南高校教員坂本昭文氏に出会えたのも奇遇だった。昭文氏は日体大OB32才で前大会ではプロとの対戦（三人抜き）を二度征して懸賞を取ったという。



乙亥大相撲会場と白木城跡

緒方家は宝暦年間創業の酒造家でもあり「緒方洪庵・児島惟賢・緒方惟貞」などの銘柄で売り出している。御当主緒方真澄氏は元大学教授で緒方藤蔵人惟照の居城「白木城の研究」で著名、佐伯史談会員でもある。

西予市には近年愛媛県立歴史文化博物館も建設され、八幡浜から野村町まで「佐伯惟教・惟真父子亡命の地」探索の研修コースとして最適である。

緒方酒造と昔の相撲場（田園）

緒方惟幸氏と緒方真澄夫妻

◆「おおいた遺産」大募集

大分合同新聞社が公募している「おおいた遺産」について、真柴会長から城山を推薦してはどうか、と提言があった。城山は佐伯藩時代の歴史的シンボルであり、また市街地に珍しい照葉樹林の森でもあり、山頂からの展望がすばらしい。歴史探訪・動植物の観

察会や市民の健康散策道に広く利用されており、第一の候補地である。

四教堂塾でも意見を聴取したところ日豊海岸の景観や水の子灯台、大入島・彦岳山麓の山桜、佐伯海軍航空隊跡・丹賀・鶴見・仙崎砲台跡などの戦跡、民俗芸能では「おため半蔵」の堅田踊り等が挙げられた。

その他多くあると思うが、とりあえず全国にまた県下に誇れるものを抽出して応募してみることになった。

◆事務局への音信①

拝啓、佐伯史談を愛読させて頂いた中島です。先日はわざわざお電話を頂戴し有難うございました。

私の父母並びに先祖は佐伯の出身で大変皆様にお世話になったことをもれうけたまわっております。

先祖代々の墓も未だ久成寺にあり毎年墓参りが出来ず心苦しく思っております。父母からの話ですが四教堂の教授をしていた中島益太（米華）の一族と聞いておりました。

又史談会の創始者である羽柴先生も東京の世田谷の自宅に良くお見えになり、佐伯に帰省した際も大変お世話になりました。母は一時期中野村小学校の教員をしていたと聞いております。

母から昔のことを良く聞かされ佐伯藩の藩主である毛利さんの息女である近衛千代子様（東条内閣の前の総理大臣の夫人）と城山で良く遊んだ事等話しておりました。東京で荻外荘（荻窪で近衛文麿氏が自殺した場所）にお住みになり、私の母と電話で話をしておりました。

私の先祖である中島罷一郎は漢学者であり、広瀬淡窓塾に学んだ事、羽柴先生よりお聞きしております。

又武道家であり、真実はわかりませんが孝明天皇の御前で御前試合を江戸の桃井道場の達人と行ったとの事で、結果は引き分けと聞いております。

又罷一郎爺は佐伯の私学（鶴谷学館）で国木田独歩と一緒に教鞭をとっており、二人は確執があったと聞いております。（この事は五，六年前の佐伯史談誌に掲載されていました。）

私の親戚も佐伯には全く少なく鶴岡町の関さんだけとなり（関さんは以前市

役所の収入役をしておりました）さびしい限りです。佐伯に帰った時是非河野様とお逢いしたく思っております。私も七十二才となり元気で日々を過ごしております。

末筆ながら佐伯史談会の益々の発展をお祈り申し上げます。

敬具　中島　茂

前に記した事言いつたえ事でございますので、良く検証下さい。何かの参考資料になるのではないかと思いまして。

◆山崎寿山の遺品

佐伯藩士山崎太右衛門の長男太四郎は日田の咸宜園に入門し、のち江戸滞在中、谷文晁について画を学び名を文内、又、文民と改め、寿山と号す。弟久保田南崖の作品は佐伯に多く残されているが、寿山の作品は極めて少ない。（大分県近世美術所在調査報告書より）

この度入会された寿山の子孫山崎敬さんに所蔵品の一部を拝見させていただいた。

右短冊　山崎寿山夫妻の辞世

山崎寿山（文民）山水図